

# DOWLAND'S LACHRIMAE ダウランドの《ラクリメ》

ジョン・エルويس  
加藤 拓 未 訳

本稿は、本研究所および文学部芸術学科の主催のもと、一〇年六月四日(金)に本学白金校舎内チャペルにおいて行われたジョン・エルويس John Elwes 氏によるレクチャーコンサートの内容を活字にしたものである。

エルويس氏は、偉大な作曲家ベンジャミン・ブリトウン Benjamin Britten (一九一三―一九七六) に見出された英国の名テノール。氏は本学院とも所縁が深く、二〇〇八年の《マタイ受難曲》公演と二〇〇九年の《メサイア》公演で明治学院バツハ・アカデミーと共演したほか、氏による声楽マスターコースも学院内で開かれ、そのレッスンを受けようと数多くの受講生が集った。

さて、当夜のレクチャーコンサートは、エルويس氏が愛してやまない、母国のルネサンス時代を代表する作曲家ジョン・

ダウランド John Dowland (一五六三―一六二六) の魅力に、解説と実演で迫ろうとするものであった。チャペル中央の演壇の真下にエルويس氏が構え、リュートチェンバロを演奏する渡邊順生氏と、司会と通訳を担当した訳者が両脇を固めた(図1)。

夜のとばりがチャペルに下り、時刻が七時をまわると、ふいにリュートチェンバロのやわらかく静かな音色が響きだした。ダウランドの名曲《涙のパヴァーヌ》(一五九五)の旋律である。そして、間髪いれずエルويس氏の歌がつづく――

わが思いには希望の翼 わが希望には愛の翼

愛よ 澄みわたった空にのほり 照る月に告げよ

大空を歩き来する月さながら



図1 ジョン・エルウィス氏(中央)、渡邊順生氏(左)、訳者(右)

かけては満ちるもの それがわが愛と  
明日の耳もとに そつとささやけ

「希望」はしばしば首うなだれ 「信頼」は涙するものと

疑いを拭いきれぬわが思いよ

恨めしければ あの人に告げるがいい

「変わつてもついに変わらぬのが このわたし

あなたもまた変わると見えて 同じあなた

不信は心に忍びこむ でも心を蝕むことはない

疑念の隠し味でいやまして甘美になるもの それが愛なのだ」

それを聞いて あの人が眉くもらせ

美しい月夜の空がかきくれるなら

激しい風のようなおまえの溜息で 黒雲を吹き散らせ

あるいはおまえの涙で 雨に変えてしまおうがいい

思い 希望 愛 すべてをぼくは失ってしまう

ぼくの月の女神シンシアが 前と同じく輝かなければ

(佐藤 章訳)

ダウランドの歌曲集 第一巻 *The First Booke of Songs or Ayres*  
(一五九七)より《わが思いには希望の翼》*My thoughts are*  
*winged with hopes* である。この歌でもつて、エルウィス氏の  
レクチャーコンサートは、いよいよ幕を開けた。

\* \* \*

「流れよ わが涙 泉より滝となりて 永遠に追放されて  
 ぼくは歎きに浸ろう」——これがジョン・ダウランドの最も有  
 名な歌曲の最初の歌詞です。ダウランドはこの曲のタイトルを  
 《ラクリメ》、つまり「涙」としました。この歌は、あまりにも  
 絶望に満ちあふれています。そのため、私たち聴き手は、この  
 歌が表現している深いメッセージに——それはあたかも個人的  
 なものにも思えますが——感動を禁じえません。これは、苦悩  
 する魂の嘆きなのです。それもダウランドの魂です。これはダ  
 ウランドの墓碑銘であり、彼の署名とも言えます。

さて、ダウランドは、なぜこれほどまでこの《ラクリメ》に  
 親近感をもったのでしょうか。このような「涙」と「悲しみ」  
 の世界に埋没するようになったのは、いつからでしょうか。ダ  
 ウランドは生来、メランコリックな気質を持っていたように思  
 えますが、これほど涙に明け暮れるためには、なにか別の理由  
 もあったのではないのでしょうか。これらの答えを探るために  
 も、私たちはダウランドの若い頃を振り返ってみる必要があり  
 ます。そして、そこからなんらかの推論を導くことができるか  
 もしれません。

実はダウランドの若い頃に関して、あまり詳しくはわかって  
 いません。その代わり、わかっていることは、ほとんどダウラ

ンド本人による、様々な手紙や出版物を通じて得られた情報で  
 す。まず一五八〇年、十七歳の若者であったダウランドは、フ  
 ランス王国駐在大使ヘンリー・コバム卿の随行員としてパリに  
 渡りました。ダウランド自身の言葉によれば、当時、フランス  
 に有名なリュートの教師がいたことから、リュート演奏の腕前  
 をあげるためにパリへ渡ったとしています。また、音楽全般に  
 関する知識を、より広く、より深く学びたいという強い情熱も  
 ありました。

ダウランドはプロテスタント教徒として生まれましたが、パ  
 リに在る間にカトリックへと改宗してしまつたのです！ 当時  
 の彼はまだ若く、人生経験もありません。宗派を変えてしまつ  
 たことで、将来イギリスに戻ったときに、どのようなことが待  
 ち受けているか、そのときは想像できなかつたのです。

十六世紀を通じて、宗教は政治と深く結びついていました。  
 たとえば、ヘンリー八世が、ローマ・カトリック教会と袂を分  
 ち、それをきっかけにイギリスの宗教改革がはじまつたこと  
 を思い出してみてください。ところが、ヘンリー八世の長女メ  
 アリーが王位につくと、彼女はふたたびカトリック主義に戻し  
 ます。メアリーは、熱心で忠実なカトリック教徒であり、強大  
 なカトリック国であるスペインのフェリペ二世のところまで、  
 はるばる嫁ぎに行つたほどです。メアリー女王の決めたことに  
 反対した者には、恐ろしい結末が待っていました。メアリーの  
 在位は、わずか五年でしたが、その間に三〇〇人ものカトリッ

ク反対者が処刑されています。しかし、ヘンリー八世の次女で、プロテスタント教徒であるエリザベス一世が王位につくと、またプロテスタント主義に改めたのです。

エリザベス女王自身は、すべての宗教に対し分別よく、寛大でした。たとえば、厳格なカトリック教徒で知られる有名な作曲家ウィリアム・バード William Byrd (一五四三—一六二三)でさえ、王室礼拝堂のジェントルメンになる際、宣誓就任を認めているのです。エリザベス一世は、バードのミサ曲やモテツトを賞賛していました。彼女の興味は、バードの音楽にあつて、宗教ではなかつたのです。

しかしエリザベス女王は、ほかの宗教に寛容であつたにもかかわらず、国内の宗教不安と、それにまつわる政治的な危機に対しては極端に敏感でした。一五八三年と一五八六年に、エリザベス女王に対する深刻な陰謀が企てられました。それはスコットランド女王で、カトリックのメアリーをイギリスの王位につけようというものでした。エリザベス女王はこれらの陰謀に対し、迅速な対応を打ち、処刑の嵐が吹き荒れました。スコットランドのメアリー女王は、結局、一五八八年にギロチン刑に処されたのです。同じく一五八八年、スペインのフェリペ二世は、イギリスを侵略し、異端であるエリザベス女王を退位させるために、名高い無敵艦隊をイギリスに差し向けます。ところが無敵艦隊は完全に敗北し、甚大な損失をこうむりました。それでも、やはりエリザベス女王は、宗教に対し寛大であつたと

いうこと、そして、彼女にとつて問題だつたのは、宗教そのものではなく、宗教にもとづく政治的な主張の方だつたということとは確認しておく必要があります。

一五八四年にダウランドは、フランスからイギリスに戻りますが、帰国後数年間の動向はあまりよくわかっていません。わかつているのは、ダウランドがオックスフォード大学で音楽を学んで卒業し、次第にリユートの達人として頭角を現しはじめたということです。同じ頃から、声楽曲や器楽曲の作曲も手がけるようになりましたが、当時はまだ、作品を出版することはありませんでした。それでは、ここでダウランドの《ラクリメ》が誕生する前に書かれた作品を二曲、聴いていただきましょう。いずれも、メランコリックな愛の楽しく、穏やかな一面を描いた作品で、エリザベス一世の時代に、たいへん賞賛されました。

《おいで さあ かわいい人》Come away, come sweet love

〜歌曲集第一卷(一五九七)より

おいで さあ かわいい人

黄金の朝が来た

地も天もすべて

愛と喜びを語る

今ぞ その腕の抱擁のとき

そして甘美な ばら色の唇のくちづけのとき

ほくたちの魂を 至福のうちに溶け合わそう

目は 美のやさしさのために作られたもの  
眺めつつ嘆け 愛の長い痛み  
美のむごいつれなさの落し子を

おいで さあ かわいい人

黄金の朝が過ぎてゆく

太陽が天空より

焰の矢を投げて

影という影を追いはい

戯れつつ 森の中にただよっては

ひそやかな恋人たちを楽しませている

急いで かわいい人 あそこへ行こう

空を飛んで 欲望に燃えつつ

ぼくたちの翼は 甘い希望と 天上の焰

おいで さあ かわいい人

美を空しく飾らないで

美のやさしさは

赤裸々な空のように現れるべきもの

川辺の百合

美しいキュプロスの咲きそめた花々は

みずからの美しさのほかには 美を求めない

飾りものは 驕慢の育ての親

快樂は愛の喜びの尺度

急いで かわいい人 今ぞ憧れの翔び立ちのとき

(佐藤 章訳)

《めぐめよ 愛》Awake sweet love

〔歌曲集第一卷(一五九七)より〕

めぐめよ 愛 追放は終わった

遠くにあつて 歎きに沈んでいたわが心は

いまは欠けるところなき喜びにひたっている

遠く離れても死ぬことのない愛が

今度はあの人の目に永久に生きつづけるように!

あの人の目こそ ぼくの最初の不幸の源だった

あの人しか美しく見えなかつた

あの人しか ぼくは愛することができなかつた

そしてあの人だけが その無情さによって

ぼくを絶望へと追いやつたのだ

絶望のあまり ぼくは死を思つた

この喜びにけりをつけようと願つて

そう ぼくを追放したあの人だけが

いま ぼくの身分をもとに戻すことができるのだ

もしあの人がわが愛をいささかでも大事と思つてくれるなら

絶望の試練をへてきたこの愛を

あの人は二度と悲しませることはないはずだ  
絶望がいみじくも証明したように

わが愛は たとえ久しく不毛だったとはいえ  
けっして変わる日はこないだろう

あの人がついにわが愛に報い  
数々の心の傷を癒してくれるなら

わが愛のしあわせは 絶望の深淵から  
よみがえっただけに いっそう甘美であろう

いま帰還したわが愛が 久しぶりで会うあの人に  
こころよく迎えられるならば

あの人はつまりわが愛とわざと戯れていたのだ  
わが喜びをいやまして甘美にするために

(佐藤 章訳)

ジョン・ダウランドは、一五九〇年代のはじめには、イギリスだけでなくヨーロッパにおいても、最も有名で最も尊敬される音楽家となりました。しかしながら、ダウランドほどの才能ある音楽家として成功とは、エリザベス女王の宮廷に雇ってもらうこと以外に考えられなかったのです。それはすべての音楽家にとっての最終目標でもありました。

才能と言えば、エリザベス女王は、驚くほど才能に恵まれた人物でした。彼女は、ヨーロッパのほとんどの言語をよどみな

く話し、ラテン語とギリシャ語の研究者であり、ひいては優秀な外交官でもありました。しかし、エリザベス女王が最も関心を持ち、また、最も才能を発揮したのは、音楽や文学、舞踏や演劇といった文芸全般だったのです。彼女は、芸術の中心にたち、芸術において驚くべき豊かな創作力を活き活きと示しました。まるで、すべての芸術と芸術家たちが、靈感を得るために自然と彼女に惹かれていったかのようでした。

一五九四年、ダウランドは三十一歳となりました。おそらくこの頃までには、もう結婚していたでしょうから、生活や仕事における安定が必要でした。そこへ大きなチャンスがやってきました。この年、エリザベス女王お抱えの宮廷リユート奏者のひとり、ジョン・ジョンソン John Johnson (一五四〇頃～一五九四) が亡くなったのです。当然、ダウランドは後任になりたいと申し出ました。この空いたポストに自分こそが最もふさわしい候補者だと、ダウランドは思ったと伝えています。私もそうだったと思います。ところが！ そうはならなかったのです。彼は、失敗したのです！

ダウランドにとって宮廷リユート奏者になれなかったことは、ものすごいショックだったことは間違いないでしょう。選ばれなかったことが、まったく理解のできない状況だったことでしよう。なぜ失敗したのか、そして、これから何をなすべきか——ダウランドが納得する唯一のポストは、エリザベス女王の宮廷にしかなかったのです。まさにこの一五九四年の事件は、

ダウランドをより暗い、憂鬱なメランコリーの精神状態へと蝕んでゆく、実質的な第一歩となりました。そして翌一五九五年、ダウランドの作品のなかで、最もよく知られているリュート独奏曲が生み出されるのです。そのタイトルは《ラクリメ・パヴァン》つまり《涙のパヴァーヌ》です。これは、ジョン・ダウランドの涙にほかなりません。

ダウランドは、この失敗におおいに苦しみ、失望しました。そして彼は、旅に出たいという衝動に駆られます。それは、この苦い敗北感から逃げたかったからなのかもしれません。家族を残し、ダウランドはドイツのブラウンシュヴァイクとヘッセを訪れました。そこで、彼の演奏と作品はおおいに賞賛され、高い評価を受けたのです。

さらにダウランドは、イタリヤの有名な音楽家たちと親交を深めたいと思い、イタリヤへ向かいました。ところがフィレンツェで、イギリス人のカトリック過激派と遭遇します。そして、彼らの政治的な画策や、イギリスに帰国してエリザベス女王を転覆させようという計画にダウランドは心底、翻弄されました。そのとき、女王の発言をふと思い出しました。かつて女王は、ダウランドを「頑固なカトリック」と評したのです。ダウランドは、なりたくて仕方のなかった宮廷リュート奏者のポストを、なぜ手に入れられなかったか、その原因に気づきました。それは、彼のカトリック信仰のせいだったのです。ただし、ダウラ

ンドは、けっしてカトリックの政治的過激派ではありませんでした。しかし、これからイギリスに戻ったとき、特に宮廷で、そう思われてしまう可能性はあります。ダウランドはそれを恐れました。そこでダウランドはフィレンツェ滞在中の一五九五年、ロバート・セシル卿宛に、長文の真剣な手紙を書きました。セシル卿は、エリザベス女王が最も信頼し、影響力をもつ重要な顧問官だったのです。この手紙のなかで、ダウランドは、過去に招いてしまったと思われるあらゆる誤りに関して、許しを乞うています。ダウランドは、自分がこれまで熱烈なカトリックであったことは一度もなく、カトリックへの改宗は若気の至りにすぎなかったと書いていますし、さらに帰国後は、当然、生来のプロテスタント信仰に戻ると書いています。そして、彼の唯一の望みは、女王に仕えることだと手紙のなかで述べています。

この手紙を書いたのと同じ頃、宮廷につとめている仲の良い友人から、エリザベス女王が本気でダウランドをイギリスに呼び戻したいと望んでいる、という話を伝え聞きました。おそらくダウランドは、セシル卿や宮廷の友人の助けで、ついに念願がかなうと思ったことでしょう。そこで、ダウランドは、はやる思いでイギリスに帰国しました。

ダウランドは、大いなる期待をもってイギリスに帰国したことは間違いないと思います。ところが、お呼びはいつさいからなかったのです。ダウランドは落胆しました。今回の失望から、

ダウランドはふたたび、重い拒絶反応を引き起こします。明らかにダウランドは、生まれつき強烈なメランコリーに襲われるタイプの人間でした。これは、彼の気質です。

メランコリーは、喜びや、悲しみ、寂しさといった様々なレベルの感情を伴う、一般的な病気として、エリザベス朝時代には周知のものでした。むろん、どの時代にも存在した病気ですが、イギリス史上、ダウランドのように、これほど自らの感情を自覚し、それを明瞭に表現した人物がいた時代はほかにありません。当時、詩と音楽は、そうした感情を表現する手段として好まれ、教養人はみな、詩と音楽に耽りました。

ダウランドは、人生の限界にきていました。もはや世間の目や評価のなかで、自活する以外になかったのです。一五九七年、ダウランドは歌曲集第一巻を出版しました。この曲集には二十一曲もの歌曲が収録され、そのなかにはダウランドの若い頃の作品や、軽い歌、楽しい歌も含まれていて、ダウランドによれば、これらの作品は「それぞれが書かれた時点において十分に成熟している」と伝えていきます。しかし、なかには新しい作品や、怒りに満ちた歌、泣き言をいう歌、悲しみの歌も含まれています。こうした作品のなかで、ダウランドは暗く寂しい思いを表現し、自らの重苦しい心境を明らかにしています。

《きみたち 愛と運命に裏切られた者よ》*All ye, whom love or fortune*  
歌曲集第一巻（一五九七）より

きみたち 愛と運命に裏切られた者よ  
きみたち 喜びを夢みつつ悲しみに生きる者よ  
きみたち 希望に満たされる日に会えぬ者よ  
きみたち ため息と病から逃れんとする者よ  
耳と涙を 誰よりも幸薄い人間に貸してくれ  
瀕死の白鳥のように歎きを歌うこのほくに

内なる痛みに苛まれる心のわずらいと  
心労がついに人目にさらけだしてしまう痛みが  
ともどもに 容赦なく ぼくを駆り立て 歎かせる  
だが それもむなしい ぼくの歎きに心痛める者などいないのだ  
涙 溜息 たえない叫びを ぼくはひとり費やす  
ああ ぼくの悲しみに慰めを そしてぼくの歎きに終わりを！  
(佐藤 章訳)

《もしぼくの歎きが》*If my complaints*

歌曲集第一巻（一五九七）より

もしぼくの歎きが激しい思いを動かせるのなら  
また愛の神の目をぼくの不当な苦しみに  
向けさせることができるのなら

わが思いの激しさは 何よりの証拠

この絶望はほくをあまりに久しく支配してきたのだ

愛の神よ ほくの生も死も きみのうちにあり

ほくの深いため息は きみの悲しみを語る

きみの傷口は ほくの身に血を流し

ほくの心は きみの非情に破れる

しかしまたほくが絶望するとき きみは希望に満ち

かと思えば ほくの望みを空望みにしてしまふ

ほくの痛みを癒してくれるといいながら

癒すかわりに ほくをいつまでも歎かせる

愛の神が富みさかえて ほくが貧しいとは！

愛の神が裁判官なのに ほくを有罪にするとは！

きみは ありあまる宝を ほくに与え惜しみ

あの人という神を作りながら 自分の力をながしろにする

ほくの命は きみの力あればこそ

ほくの願いは きみの値打ちがあればこそ

男たるもの 愛の神によって苦い生を味わう定めなら

ほくの愛を ほくの生を 奪ってほしい

ほくの希望は死んでも まことの心は死なぬ

ほくの滅びの噂を耳にする人々よ 絶望するがいい

ほくの心の語る言葉に 偽りはない

「愛の神がほくを裏切っても

ほくが愛の神を裏切ったことはない」（佐藤 章訳）

これまで歌った五曲の歌は、すべて一五九七年に出版された歌曲集 第一巻のなかに収められています。この歌曲集は、たいへんなヒット作となり、合計で五回も版を重ねました。この成功は、宮廷への就職に失敗し、落ち込んだダウランドをいくらか慰める結果となりました。

実はこの曲集のなかに、エリザベス女王を批判したと思われる歌もいくつか見受けられます。ですから、ダウランドはもうエリザベス女王に好かれようとは思ってなかったのかもしれない。エリザベス女王は自ら演奏し、歌うことで、ダウランドのすべての作品を知っていたことは、ほぼ間違いありません（女王は、リユートとヴァージナルの名人でもありました）。当然ながら、このような批判にも気づいていたはずですよ。

歌曲《ほくの受けた苦しみを》の歌詞を書いたのは、間違いなくエセックス伯爵のロバート・デヴェルーでしょう。このデヴェルーという人物は、エリザベス女王のいわゆる「お気に入り」でした。彼はハンサムで、颯爽とし、女王よりもずっと若かったです。デヴェルーは、女王に興味を抱き、女王もまんざらではありませんでした。デヴェルーは詩の才能に恵まれましたが、性格は極度に怒りっぽく、横柄で、時として露骨に子供っぽいところがありました。ですから、ふたりは、よくケンカをしました。こうしたケンカの末、デヴェルーは宮廷から追

い出されたこともありまして。追放の原因は彼にあり、彼が自分に対する女王の扱いに不満をもっていたからです。そして、こうしたデヴェールの不満が、エレガントでメランコリックな詩のなかで表現されているのですが、女王が読めば、それがなにを意味するのかは、あまりにもはつきりしているわけです。

むしろダウランドも、作曲の際、そういう詩には強く共感したことでしょう。しかし、デヴェールの詩に音楽をつけても、ダウランドがエリザベス女王のリユート奏者となるのに、プラスになることはありません。さて、つぎの曲で「She'sつまり」あの「人」というのは、エリザベス女王に他ならないのです。

《ぼくの受けた苦しみを》(Can she excuse her wrongs

〜歌曲集第一卷(一五九七)より

ぼくの受けた苦しみを 美德の衣に隠れて言い抜けられる？

非情とわかつたあの人を 心優しい人と呼べる？

澄んだ焰なら どうして煙の中に姿をくらます？

果実を求めて得られぬのに 葉を讀えよと？

なんと無法な！ 影が実体として通るところでは

よほど目を見張らないと 錯覚に陥りやすい

冷たい愛は 砂の上の文字か

水面に浮ぶうたかたにも似ている

あの人がおまえへの仕打ちを正そうとしないのにおまえはいつでも錯覚にすがるのか？

あの人の心を征服できぬかぎり

おまえの愛は たえて実を結ぶことはあるまい

あの人がぼくに拒んでいる高貴な喜びのかずかず

それに憧れるだけの 気高さを ぼくはもっていたつもりだ

喜びが高貴なほど ぼくの望みも気高かった

それを拒むあの人は では何をくれるのか？

理性というものに従う気持ちか もしおありなら

「愛よ正しくあれ」と命じる理性の声が聞こえるはず

さあ 拒まずに ぼくを幸せにしてくれたまえ

さもなれば せめて早く死なせてくれ

千度も死ぬほうがましだ

このように苦しみながら生きるよりは

でも いとしい人 おぼえていてくれたまえ

ぼくはきみのために心満ち足りて死んだのだと

(佐藤 章訳)

歌曲集第一卷の出版は大成功しましたが、それでもダウランドは定職につけませんでした。当時のダウランドは、作曲家

としても、リュート奏者としても、最も充実した時期をむかえていたことは確かです。しかし、これからどうすれば良いのでしょうか。ダウランドにとって、あまり良い状況とは言えませんでした。

一五九八年、ついにダウランドのもとにデンマーク王クリスチャン四世の宮廷から、重要なポストのオファーが来ました。王室からのオファーですから、たいへん名譽あるお誘いです。クリスチャン四世は、たいへん熱心な音楽の擁護者で、すでに何人も著名な音楽家たちを雇い入れていました。そして、有名なダウランドを獲得するのは、重要なことだったのです。

すでに申しましたが、ダウランドは結婚し、妻と子供がいました。しかし、ダウランドは、デンマークに独りで行くことと決意します。ひよつとすると、ダウランドはあまり長くデンマークにいるつもりはなかったのかもしれない。あるいは、妻と子供に会うため、頻繁に一時帰国をくり返すつもりだったのかもしれない。あとから妻と子供を、デンマークへ連れてゆくつもりだったのかもしれない。ダウランドは、妻や子供に関する情報をほとんどなにも残していませんので、そのあたりはあまりよくわからないのです。ダウランドにとって、家族と離れ、イギリスから離れるということは、あまり良い環境とは言えません。自分の才能に見合うと思える職がほかになかったで、ダウランドとしては仕方がなかったのです。

デンマークでの最初の二年間は、順調のように見えました。

給料もよく、たび重なるイギリスへの帰国も、おとがめはありませんでした。しかし、ダウランドの心のなさは、あまり幸せでなかったことは明らかです。母国から遠く離れていることは、彼のメランコリックな氣質を確実に助長させました。ダウランドの心のなかには、寂しさがあったのです。彼は、その寂しさを歌曲集第二巻 *The Second Booke of Songs or Ayres* のなかで告白しています。この歌曲集はダウランドからイギリスの妻のもとへ送られ、一六〇〇年に出版されました。この歌曲集には、ダウランドの作品のなかで、もっともメランコリックな歌がいくつが含まれています。ダウランドは一五九五年の有名な《ラクリメ》の主題をふたたび取り上げ、今回はそれに歌詞をつけました。作詞を行ったのは、十中八九、ダウランド本人でしょう。この《ラクリメ》からは、ダウランド自身の抱える、本当に深い悲しみが聴こえます。この歌はある意味で、彼の本当の涙に最も近い作品です。彼は深く落胆し、そこから今度は、この歌における言葉と音楽の結びつきを通じ、聴衆と、そしておそらくエリザベス女王とも直接の対話を行って、自分の深い悲しみをわかちあつてほしいと望んだのです。

《流れよ わが涙》 *Flow my tears (Lachrimae)*

（歌曲集第二巻（一六〇〇）より）

流れよ わが涙 泉より滝となりて

永遠に追放されて ぼくは歎きに浸ろう

夜の黒い鳥が 悲しい辱めを歌っている  
その闇のなかで ぼくはひとり打ちしおれて生きよう

失せよ むなしい星たち もう輝くな

夜の闇は いかにも深くとも 深すぎはしない

絶望の淵で 運命の末期を歎く者にとつては

光はただ恥辱を照らし出すばかり

この悲しみ けつして癒される日は来まい

なぜなら 憐れみはもはやあとかたもなく

涙とため息と呻きが ぼくのうとましい日々から

あらゆる喜びを奪ってしまったのだから

こよなき幸せの絶頂から

ぼくの運命は転落してしまった

恐れと歎きと痛みが 蔑さみのうちに

消え去った望みに代わって ぼくの望みうるすべて

聞け 暗闇に住まう影たちよ

光を忌み嫌うがいい

幸いなるかな 地獄に落ちて

この世の蔑さみをもはや感じえぬ者よ (佐藤 章訳)

《乞い求める。》 Shall I sue

〔歌曲集第二卷（一六〇〇）より〕

乞い求める？ 憐れみを願う？

祈る？ 証明する？

天上の喜びを得るのに

地上の愛をもつてするのか？

心に血を流し

目に痛ましい涙をあふれさせ

口にため息を吐けば あの高空の雲に

到達できる などと考える？

なんとという愚かもの そんな夢は捨てるのだ

むなしい願いだ

高貴な希望には

どんな高貴な愛顧が必要か 思ってもみよ

美しい人の情けは 美しい物と同じ

真の宝は 金では買えぬ

美しい人の情けは 言葉では得られぬし

ただ思いつめるだけでも だめなのだ

憐れみをかきたてたとして しゃせん

死にゆく心には 甲斐なき頼みの綱

女というものの目には

取るに足らぬ男の歎きなど ききめはない  
 ああ あの人は ぼくのような男には  
 あまりにも立派すぎるのだ  
 確かに残酷だ だがあの人は正しい  
 ぼくは辱められても 正當なのだ

正義の女神の裁きは まこと正しい  
 たとえぼくの愛が正しくとも

あの人はぼくの歎きを憐れんではくれまい  
 とすれば ぼくは死ぬしかない  
 愚かな心よ だから 死ぬがいい  
 絶望のうちに滅びるがいい  
 ただ せめて 神よ ご照覧あれ  
 美しい人のために死ぬぼくの 潔い死にざまを

(佐藤 章訳)

《悲しみよ ごままれ》 Sorrow, sorrow stay

〔歌曲集第二卷(一六〇〇)より〕

悲しみよ とどまれ まことの悔いの涙を  
 苦しみに打ち沈んだ男に 貸し与えよ  
 去れ 絶望よ 仮借なき恐れとともに  
 ああ あわれな心を脅かすな

憐れみよ 今こそぼくを助けておくれ  
 終わりなき苦痛に ぼくを陥れないでおくれ  
 ああ ぼくは永遠の囚人  
 望みも助けも もはやなく  
 下へ 下へ ひたすら落ちてゆくのみ  
 立ち直る日は 二度と来はしない (佐藤 章訳)

デンマークにおけるダウランドの生活は、すべてが幸せとい  
 うわけではありませんでした。一六〇一年以降、ダウランドは  
 デンマーク宮廷で問題化するようになります。問題とは、お金  
 にまつわることと、イギリスに一時帰国することであまりにも  
 不在が多いことでした。その一方で、ダウランドのなかでは、  
 次第に、自らの運命を受け容れるような、ある想いが芽生えは  
 じめます——おそらく、自分はどう、エリザベス女王の宮廷で  
 音楽家として活躍することはないだろうと。

そんな想いから、ダウランドは歌曲集第三卷 *The Third  
 Booke of Songs or Aires* の準備に入ります。そして、一六〇三年、  
 その出版のために、またもやイギリスへの長期滞在をデンマー  
 ク宮廷に申し出ました。第三卷に収録された歌曲のほとんどは、  
 穏やかな愛の歌です。深刻な不満や、絶望の悲しみを内容とす  
 る歌はひとつもありません。あたかもダウランドは、すでに前  
 の歌曲集第二卷で、自分の心の奥底の想いをすべて表現しつ  
 くしてしまい、いまや自分の現状に対して、諦念に達してしま

ったかのようにです。というのも、エリザベス女王が亡くなってしまいい、彼女に仕えることは永遠に叶わなくなってしまったのです！

《泉よ そう湧き急ぐな》Flow not so fast ye fountains

〜 歌曲集第三卷（一六〇三）より

泉よ そう湧き急ぐな

なぜそんなに急ぐ必要があるのか

山よりも高く ふくらむな

時間をむだに過ごすな

やさしい泉よ おまえの塩からい涙は

たえまなく 静かに その目からしたり落ちるのだ

大げさに泣き急ぐのは「理性」や

「時間」の力で苦しみをやわらげることのできる者たち

ほとくの悲しみは 季節や

そのほかの何ものにも だめられることはない

やさしい泉よ…

「時間」は平凡な苦しみを

減じてくれる

しかし 平凡な悲しみとは 気の迷いにすぎぬ

真の苦しみは つねに残るだろう

やさしい泉よ…（佐藤 章訳）

《思いをとげられるとしたら どうしよう》

What if I never speed 歌曲集第三卷（一六〇三）より

思いをとげられるとしたら どうしよう

手もなく 絶望に身をまかせ

どんな損失も 償うことができない

悲しみのなかに 生きてゆこうか？

それとも 恋人をかえようか？

ほくには 別れる力があるし

分別をもって 自分の心を思うままに

動かしてみせられる

でもあの人がほくをあわれみ 愛に報いてくれるなら

あの人はいつまでも ほくの大切な喜び

来たれ 来たれ きみを望む心の冷めぬうちに

来たれ きみをいつも愛するか

讚えているほくのもとへ

いつも ほくは成功を夢みるが

まだ その旨味を味わったことはない

しかし 悩みによる疲れと

悲しみは繰り返してゆく

なんども ぼくは希望を捨てた

運命に見捨てられた 不幸な男として

しかし 愛は常にねらいをさだめているから

愛がなくなつたと思つても またもどつてくる

真の希望を求めた男は そこから去ることはできない

なぜなら キューピッドは すべてのハートの王様だから

来たれ 来たれ きみを望む心の冷めぬうちに

来たれ きみをいつも愛するか

讀んでいるぼくのもとへ

(佐藤 章訳)

一六〇三年、ロンドン是最悪の疫病に襲われました。三千人以上の人々が亡くなり、逃げる事ができる人々はみな首都を去りました。ダウランドは、ふたたびデンマークに戻り、ただちに《ラクリメ》の主題による最終バージョンの創作に入りました。彼はつねに人生において、押しつぶされそうな苦しみを感ずると、自らが生み出した《ラクリメ》の主題に安らぎを求めたのです。新しいバージョンは完全な器楽曲で《ラクリメ、または七つの涙》と名付けられました。編成は、五つのヴァイオル(またはヴァイオリン)と、リュートです。《七つの涙》には、それぞれタイトルがつけられています。標題と言つても良いかもしれませんが。七種類の嘆きというわけです。この形式に関して、ダウランドによる説明はなにもありません。ですが、いかに彼が、人生の「寂しさ」と「悲しみ」の虜であつたかを

物語っています。人間のあらゆる状態のなかで、「寂しさ」と「悲しみ」にダウランドは慰めを覚え、彼の最高の音楽は、この二つの要素のために生み出されたことを、またもこの作品が示しているのです。

イギリスに戻つたダウランドは《ラクリメ、または七つの涙》を完成させ、新しく戴冠したアン女王に献呈しました。アン女王は、ジェームズ一世の妻であり、クリスチャン四世の妹です。そして《七つの涙》は一六〇四年に出版されました。

ダウランドは一六〇六年までに、イギリスへの完全帰国を果たします。帰国後、あちこちの貴族の邸宅で小さな仕事を引き受けていましたが、彼の創作力は終わりをむかえつつありました。しかし、ダウランドの生まれ持ったメランコリックな気質は、最後の輝きを放ちます。ダウランドの息子ロバート・ダウランド Robert Dowland (一五九一頃～一六四一)は、一六一〇年にヨーロッパを代表する音楽家たちの歌曲を集めた作品集を出版します。タイトルは『音楽の饗宴』 *A Musical Banquet* です。この作品集のために、父のダウランドは、歌曲暗闇にぼくは住みたい》を作曲しています。この作品は音楽と歌詞の両面において、完全なる悲しみを驚くほどに表現しています。そして、これがダウランドのラクリメ(涙)の旅における、ある意味での、ひとつの結論と言えるでしょう。

《暗闇にはくは住みたい》 In darkness let me dwell

（ロバート・ダウランド編『音楽の饗宴』（二六一〇）より）

暗闇にはくは住みたい 「悲しみ」を地面に

「絶望」を屋根にして 陽気な光を締め出そう

壁はいつも涙で湿っている黒い大理石

おぞましい不協和な音楽で 安眠を遠ざけよう

そんなふうに悲嘆を募り 墓石を床として

ぼくは生ける屍となりたい 真の死がくるまで

（佐藤 章訳）

一六一二年という年は、ダウランドにとって重要な年でした。

あの夢が、イギリス王室に仕えるという、あの夢がついに実現したのです。ダウランドは、新国王ジェームズ一世の宮廷リート奏者のひとりに任命されました。ダウランドは、ついに手に入れたのです。おそらく、この突然のうれしい出来事から、ダウランドは同じ年に最後の歌曲集を出版したのではないでしょう。タイトルは『巡礼の慰め』 *A Pilgrim's Solace* です。

今夜は、お話と演奏を通じて、ダウランドの性格におけるもっとも重要な一面にこだわって参りました。それは、彼の深いメランコリックな性質です。このような性質を持っていたからこそ、あのような偉大で、たいへん深い感動を覚える作品が生まれたのです。特にダウランドの名曲《ラクリメ》の美しさは、

こんにちの私たちの琴線にも触れるものがあります。

さて、ダウランドは八〇曲以上の歌を作曲しましたが、なにかもが悲しい歌ばかりというわけではありません！ 今夜のおしまいにダウランドの歌曲集第二巻から、一曲、歌わせていただきます。この歌は、パストラーレ風の軽やかな音楽で、つぎのような警告を含んでおります。「愛にご用心。そんなものはくだらない！」。（図2）

《羊飼いが木陰で》 A shepherd in a shade

（歌曲集第二巻（一六〇〇）より）

羊飼いが木陰で 歎きつつ

愛の苦しみを 訴えた

その相手は 世にも美しい牧場の娘

その嘆きの歌は こうだった

愛と運命の望むままに ぼくはつねに

きみの素晴らしい目を讀えつづける

美しいニンフよ きみにとって

ぼくが悲しみゆえに死んだとて 何の栄光にもなるまい

さあ ぼくの心を返しておくれ

きみの甘い眼差しで殺された心を

さもないと 蔑さみに耐えかねて ぼくは歌い出だすだろう

ああ 愛なんて 愚かしいもの



図2 終演時のエルウィス氏  
(歌手の波多野睦美氏と談話中)

ぼくの心を ああ残酷な乙女よ  
きみは救うことができたのに 殺した  
なぜ この心を そんなにも粗末に扱い  
墓に葬ることもなく 放り出すのか？  
ああ せめてきみの心と思い出のなかに  
眠らせておくれ さもないと この心  
絃をかきならして 歌い出すだろう  
ああ 愛なんて 愚かしいもの (佐藤 章訳)